

イセエビ放流技術開発試験 (要約)

増養殖対策科 石 井 功

当事業報告書は別途「平成10年度イセエビ放流技術開発試験報告書 H10年3月 高知県他」として印刷されているので要約とする。

1 プエルルス、稚エビ、小型エビの中間育成

籠飼育試験では稚エビ1-6期での友食が多く、生残率と収容密度が関連していることがわかった。又生残率を高めるために行ったかまぼこ型のシェルター試験では稚エビ3-4期で大きさとシェルターの高さが関連していた。

また個別飼育した稚エビの成長は平成7-10年度でステージ17期になり平均体重142gになった。

2 標識試験

陸上水槽でステージ別(8期10g, 10期20g, 11期30g)の標識試験をおこなった。高水温時のためか標識後8期ステージ稚エビの死亡が目立った。

平成7年度におこなった陸上水槽での標識脱落試験(25mmタグ)のその後の経過は、 $\overline{BW}10$ gでは1年後 $\overline{BW}21$ g有効標識率92%、2年後 $\overline{BW}107$ g有効標識率25%、3年後 $\overline{BW}183$ g有効標識率17%となった。また平成8年度の $\overline{BW}20$ gでは1年後 $\overline{BW}115$ g有効標識率13%、2年後 $\overline{BW}218$ g有効標識率0%となった。

3 標識放流

平成10年度放流は10月池の浦地先で実施した。平均体重129gの小形エビ200尾に25mmアンカータグを装着して放流したが11年2月現在再捕はない。平成9年度放流は9年10月池の浦で実施した。平均体重121、125gの小型エビ200尾に25mmアンカータグを装着して放流し11年2月現在再捕率は7.5%である。10年3月池の浦、志和地先で平均体重32、49、66gの小型エビ120尾に25mmアンカータグを装着して放流を実施したが11年2月現在再捕は両地区でそれぞれ

2%である。

このうち10年3月池の浦実施分は2日間潜水調査で分散状況の観察をおこない放流点より5-35m域で20尾確認し、徐々に棲所に分散していく様子がうかがわれた。

4 天然稚仔の採捕と変動機構

共通コレクターを使用して県内2ヶ所で5-10月まで採捕試験を行いプエルルス75尾、初期稚エビ65尾を採捕した。池の浦地区で昨年と同様に採捕数が少ない。また土佐清水市の杉葉コレクターによる採捕は7-8月に124尾採捕されたが例年よりも少ない。調査期間を通してみると7月下旬の新月と荒天の重なった調査日に初期のプエルルスを主体とした採捕があり、全採捕数の50%であった。

また県内3ヶ所で平成7-10年度実施したコレクター調査の推移を場所、年度等から検討すると8年度が他年に比べ付着数が多い。

5 プエルルス、稚エビの生態調査

池の浦で9、11月の2回実施した。調査場所は上甲崎、帷子崎、小島、港口の4ヶ所で上甲崎を除く場所の水深9m以浅で体長2-10cmの稚エビ合計32尾を確認した。

また平成7-10年度実施した県内11ヶ所でのプエルルス、稚エビ等の確認尾数の推移等を検討し、稚エビのいつもいる場所、稚エビと小型エビのいる場所は特定されるという結果を得た。

6 漁業実態

池の浦、志和地区での標本船調査を実施した。データベース化した。